

ミカサザ feat ai novelist

AIのべりすとサービスにおおむね書いてもらったふたなり逆アナル小説です。謎の疾走感がある。「約束」はスケブで書かせてもらった作品から。「小さな体では受け止めきれなかったふたなり性欲をいつか必ず全部受け止める」という内容です。依頼内容が好みにドストライクだったのでその後が読みたくなり、（しかしキャラについて僕の造詣が深くないので）ワンチャン設定を渡したらAIのべりすとくんがなんとかしてくれるのでは...?と、藁にもすがる気持ちで書いてもらうこととなりました。

-----

ミカヤは困っていた。長らく収まっていた、そして突然戻ってきた彼女自身のふたなり性欲に。今もむくむくとミカヤの股間は膨らみ始めていた。ミカヤのふたなり性欲は強い欲求で抗いがたいが一旦処理すればしばらくは落ち着くはずだった。

「どこかでなんとかしないと.....」

「約束、忘れたのか？」

「?!」

突然現れた聞き知った声にミカヤの心臓が跳ねる。

「サザ、いつからいたの？」

「なんでここにいるのよ!!」

「さっき来たところだ。それよりお前が俺の部屋に来たんだろ？」

「うっ.....そ、そうだったわね.....」

サザが言う通り、今日ミカヤはサザの部屋に来ていたのだ。

強い欲求にかられ、記憶が少し飛んでしまっていた。危ない兆候だ。

「で、どうなんだ？」

「え、何が？」

「だから、約束のことだよ」

「あーそれならもういいわ」

「なんだよ」

サザが不満そうな顔をした。

「だって、あんたがあんなこと言うから私も意識しちゃって……」

「そんなことか」

「そんなことですまないから困っているんじゃない」

ミカヤが眉間にシワを寄せて言った。

確かにあれだけのことを言われたあとで何もなかったように振舞うのは難しい。

でもこれは成長が遅い呪いのせい。記憶だってそうだ。彼がああの約束のことを覚えているのか、どこまではっきりと分かっているのか、確認していいものだろうか……。 「……」

「どうした？」

「なんでもない」

(もし覚えていなかったら私がバカみたいじゃない)

「じゃあさっさと済ませようぜ」

「ちょっと待って、本当に？」

「あの頃は最後まで付き合えなかったけど、今の俺なら……ミカヤの全部を受け入れられると思

う」

「サザ.....」

「ミカヤ、俺はお前が好きだ」

「うん。知ってる」

「俺と一緒に、気持ちよくなってくれるか？」

「.....ど、努力する、けど」

「よし、来い」

本当に、ちゃんと覚えているのだろうか彼は。

幼い頃、ぐちゃぐちゃに蹂躪してしまったのに。私のふたなりちんぽとふたなりザーメンでー

「ほら、寝て。辛いんだろ？」

サザはミカヤを仰向けにさせ、その上になが跨がった。

「ま、まって、心の準備が.....！」

「じゃあ待ってる。ミカヤの準備が終わるまで」

そういつてサザは静かに腰を落とす

ーミカヤの巨大なイチモツの上に。

「っ♡」

服越しとはいえ敏感になったミカヤのふたなりちんぽは衣擦れの刺激だけで甘く疼いた。

「あっ、だめ...

これ、やばいかも」

サザはゆっくりと腰を動かした。

「んふうう〜ッ！ くあああ.....」

甘い痺れが背筋を駆け抜け、思わず声が漏れた。

「ミカヤ、どうだ？ キツイか？」

「い、いえ、大丈夫よ」

強がってみたがミカヤの理性は吹き飛びそうになっていた。

いやダメだ、むかしみたいにまたサザをぐちゃぐちゃにしてしまう、このままでは――

「じゃあもう少し.....」

止める間も無くサザはミカヤのふたなりちんぽの上で腰をグラインドさせる。

「んっ♡ひっ♡ぐひっ♡なに、その腰、の使い方あっ♡おちんぽっ♡ダメ♡ぎもぢいっ♡♡」

サザは満足そうにニヤリと笑う。

「俺だって成長したんだよ、ミカヤ」

そう言って固くなった自らのチンポをミカヤのふたなりちんぽにグイッと押し付けた。

「ひいいいんッ！？♡♡？！！？♡♡♡」

ビクンっと大きく跳ね、ふたなり性欲で敏感になっていたミカヤは絶頂を迎えた。

その瞬間、サザのちんぽがズボンの中で脈動する。それが布ごしにも伝わってきた。

（イッてる、私、サザのおちんちんでイっちゃってるう.....♡♡）

「はっ♡、はっ♡、はっ♡」 荒く息をつくミカヤの顔にサザがキスをする。

「気持ちよかったろ」

「.....ええ」

その言葉に嘘はなかった。

「でもまだ終わらないぜ」

そう言うとサザはミカヤに覆いかぶさる。あまりに近い距離。荒い呼吸を抑えようとしているのが伝わってくる。自分も、彼と同じようになっているんだろうか――

サザはミカヤのふたなりチンポをそっと取り出し、自分のものと合わせて握る。

「ふあっ！ そんなところ触らないで！」

「いいから」

「ひゃうっ♡」

サザは乱暴に、しかし優しく扱き始めた。

「あ、ああ、だめ、こんなことされたら、もう.....」

「もう？」

「本当に戻れなく、なっちゃう.....っ♡」

「戻る必要なんてないさ。んっ.....俺に、約束を果たさせてくれ.....っ！ お前と一緒にいるっていう、あの時の約束を！」

「.....」

「だから、一緒に行こう、ミカヤ」

サザはミカヤの額に軽いキスをした。

「っ.....、う、ん.....っあ♡」

サザが手で2人のイチモツを扱き上げるたび、ミカヤは甘い声を出す。

「あん、ああ、やあ、サザ、サザアツ」

「ミカヤ、ミカヤ.....好きだ、愛してる」

「私も、サザのこと、大好きいつ」

ミカヤはサザを抱き寄せて唇を奪う。舌を絡ませながら、手の動きは止めない。

「ちゅ、んむ.....♡んちゅ♡はあっ♡♡♡♡♡」

サザの腰がびくん、と跳ね上がる。

「や、ば.....ミカヤのチンポにまけ、そ.....っ」

「うう♡わたひ、もっ♡わたひもらめっこんな気持ちいいのひらないっ♡負けひゃう♡」

「じゃあ一緒に負けちゃお、つか...っ！」

サザはふたりのカリを合わせ、今までで一番強く刺激した。

「~~~~~っ！！」

「~~~~~っ！！♡♡」

どぴゅり、と大量の白濁液が発射され、互いの腹にかかる。

「.....は一つ、はあ、はあ」

「.....はあ、はあ」

「どうだった？ミカヤ.....成長、してただろ、俺.....」 「うん.....サザがあんなに上手だなんて、思わなかった」

「へへ、やったぜ」

「でもね、まだ終わりじゃないよ？」

「え!？」

「今度は私の番だよ。覚悟してよね♪」

そう言ってミカヤはサザを押し倒す

「ちょ、ちょっと待って、ミカヤー」

「大丈夫、すぐ終わるから」

ミカヤはサザのズボンを全部脱がせ下着も下ろした。

「ふうん、結構大きいんだ」

「ま、まじまじと見るのは.....」

「これからもっと恥ずかしいことするんだよ」

「.....!わ、わかった、ごめん、謝るから許して」

「だめ」

ミカヤはゆっくりとサザのちんぽを指でなぞっていく。

「あんなことどこで覚えたのーえっちな腰の動かし方、とか」

「っ、どこでって、そんなー」

「答えられないんだ」

「ひっ♡」

ミカヤの指はサザのチンポから下へ行き玉をすうっと撫でていく。

に必死だった、ミカヤのことを受け入れられなかった、自分の、未熟さをずっとーぐっ...  
♡.....悔やんで、だから.....っ♡」

指はまたゆっくりと動き、サザの蟻の門渡りを下っていく。

「じゃあ、その悔しかった気持ちは私が忘れさせてあげないとね？」

「か、簡単に言うなよ、くそお.....！」

サザは顔を真っ赤にして耐えている。

「あれれ、もうサザのおちんちん.....こんなになってるけど？サザは私を受け止めてくれるんじゃないのかな.....でも我慢しなくていいんだよ、ほら、ここ」

「ひゃうッ!？」

ミカヤは爪でカリッとアナルの周りを引っ掻いた。

「んうっ.....体だって、鍛えたし.....その、ミカヤに、入れられるのを考えて、ずっと.....1人で練習、してた、から.....っく♡」

「ふうん」

ミカヤはサザの乳首を舐めながら、サザのアナルの入り口を何度も引っ掻き、そしてとうとうその中へ侵入した。

「あっ、はああああんっ♡」

「サザの声、かわいい.....ふふ、あの時から変わってないんじゃない？」

「仕方、ないだろっ！何度も練習はした、けどら

ミカヤに直接されんの、まだ2回目、なんだ、よっ...うあ、

中かき混ぜ、るのダメ、だめだっああああああっ♥♥♥♥♥」

「サザがかわいいからつい.....♥」

「俺はかわいくなんて、ねえってば.....」

「サザがそう思っても私はサザのことかわいいと思ってるから」

「.....」

「でも本当、サザのおしりの穴、本当に柔らかくなって.....トロトロで...おまんこみたい、だね♥」

「～～ツ」

サザは恥ずかしさのあまり両手で顔を隠して俯いてしまった。

「サザも気持ちよくなってきたんだよね、ほら、サザのおちんちんから垂れてくる汁で私の手、ベトベトだよ」

「うるせえ、見るな、見せんなっ」

「ふふ、じゃあこうする」

「え」

ミカヤはサザの両脚を自分の肩に乗せた。

「ちょ、これやばい！」

「何が？」

「だって、こんな体勢したら俺の、全部見えちゃう、じゃんか」

「うん、だから私が見てあげる。サザのいやらしいところ」

「!？」

サザは慌てて手で股間を隠そうとしたがミカヤに阻止された。「サザ、かわいい。サザが感じる姿もっと見せて」

「やめろ、バカ！離せよ！！」

「いいじゃない、私達恋人同士なんだから」

「.....」

サザが黙った際にミカヤは彼の手をどかし、彼の大事なところをまじまじと見つめ始めた。

「これが、サザのおちんちんだよ。私のより小さいけど、すごく綺麗で、可愛い。サザが感じてくれて嬉しいよ」

「.....」

サザは何も言わない。ただ、顔を真っ赤にして目を逸らすだけだ。

「触ってみてもいいかな」

「好きにしろ」

サザがぶっきらぼうに答えると、ミカヤはゆっくりとサザのモノを優しく握った。

「あっ.....」サザの体がビクンとはねた。ミカヤはそのまま上下に手を動かし始めた。

「ん.....あ.....くうっ.....」

「気持ち良い？サザ」

「うるさい、喋りながら動かすな」

「ごめん、でもサザが可愛いからつい」

ミカヤの手が速くなっていく。それに伴ってサザの声も大きくなった。

「あっ、ダメだミカヤ、もうイキそう」

「イッて、サザ。私の手の中で思いっきり出して.....♥」

サザの体は激しく痙攣した。同時に、大量の白い液体がサザ自身の腹や胸、顔にかかる。

「はぁ、はぁ.....」

「いっぱい出たね、サザ」

ミカヤは手を離し、サザにかかった精液を舐めとっていく。ペニス、腹、胸、そして、唇.....くすぐったそうにするサザにミカヤの顔が綻ぶ。

「私のためにサザがたくさん準備をしてきてくれたのがね、すごく嬉しくて.....私もそれに応えたいの」

「そんな.....、俺は...約束を.....」

「いいから。じゃあ四つん這いになって♥」

言われるがまま、サザは四つん這いになる。

「そのまま、お尻を上げて。うん、上手だよサザ」

サザの引き締まった臀部が露わになり、その中央には小さく窄んだ穴が見える。

「ここも...やっぱりあの時からずっと大きくなって.....♥」

サザは今まで以上に顔と股間が熱くなるのを感じた。この日を夢に見てきたが、実際の方が遙か

に快感が大きかった。

「んちゅ♥」

「?!」

ミカヤがサザのアナルにキスをする。サザが驚く間もなく舌が侵入してきた。

「やめろミカヤ!汚いってば!」

「大丈夫よ、それにサザのお尻の穴、美味しい」

「うああ.....」

「ふふ、もっと感じて、サザ」

ミカヤはサザの尻たぶを掴み、左右に広げていく。その中心にある穴が広げられ、中のピンク色の壁が見えてくる。「サザ、綺麗な色.....食べちゃいたいくらい」

「もうやめて、ミカヤ」

サザが懇願する。しかしミカヤはサザの言葉を無視して、再びサザの肛門に口をつける。

「ひゃあっ」

「じゅっ♡ずりゅ♡れるお♡♡んむ♡ぷはあっ♡♡♡」

唾液を絡ませながら、ミカヤはサザの腸内を蹂躪していく。

「んむ.....♡サザの中、あったかいね...♡♡」

「みかあ、やだ、そこ舐めないでえ、変になるう.....」

ミカヤの舌がサザの中で動くたび、ビクビクッと身体を震わせる。

「私も、そろそろ限界みたい.....サザ、ねえ、約束.....本当に、いいのかな？」

「.....うん」

サザが答えを返すと、ミカヤはサザの腰を掴む。そしてサザの中に自分のものを押し込んでいく。

「や、入ってくる.....熱い、おっきい、大きいいい！！」

サザが悲鳴をあげる。ミカヤのものがサザの肉壁を擦っていく。

「っ...はああ♡♡♡♡♡♡入ったよ、サザのお尻おまんこに私のが全部入ってる♡♡♡」

「う、動くの、待って...俺、もうこし、が蕩けて、るっ.....♡♡♡すぐ、いっちゃ、う」

サザが叫ぶ。だがその言葉とは裏腹にサザの腸内はミカヤのチンポを飲み込むように蠢いていた。「大丈夫だよ、すぐいっちゃえ♡」

ミカヤが動き始める。最初はゆっくりと、次第に激しく

「ひゃ、あっ、やめ、激し、いっ、気持ちいいところ、ばっかり、当たる、当たってる、からあ！」

サザが涙目で訴えるが、強いふたなり性欲にかられたミカヤには届かない。ミカヤがサザの耳元で囁く。「可愛い、サザ.....もっと乱れて♡」

「うああ♡あああああああっ♡♡」

「くっ♡ふう...♡♡」

サザが一際大きな声を上げる。同時にミカヤがサザの中で射精する。サザのアナルがきゅうっと締まり、その刺激でサザもまた果ててしまう。

「あー.....」

サザが脱力してベッドに倒れこむ。そのサザの頭を撫でながらミカヤが言う。「ふふ、サザ、可愛かった.....♥でも、まだ全然終わりじゃないんだからね？」

サザが息も絶え絶えに答える「分かってる、一晩中だって付き合う.....そのために俺はここにいるんだ.....だから遠慮なく犯してくれ」

「じゃあ、次も私が上でいい？サザが上で私が下でもいいんだけど.....やっぱり私はサザを犯したいな.....♥」

「分かった」

そう言ってサザが仰向けになり股を開くと、その上にミカヤが覆いかぶさりサザの尻に腰を密着させる。

そしてそのままサザの中にミカヤのちんぽが挿入された。

「んぐう！ああ、おっきい！」

ミカヤがサザの胸を揉み乳首をつまむ。

「ひゃあん！？」

サザの体がビクンッとはねる。

「サザのおっぱい、小さいけど柔らかくて好きよ。ここをこうして摘んであげると.....ほら、サザの中がぎゅって締め付けてくるわ.....♥」

ミカヤがサザの両乳首を強くつねるとサザが悲鳴を上げた。

「痛い！ああ、やめてくれえ、感じちゃう.....俺もうおかしくなっちゃうよお」

「大丈夫、サザは私のものだもの。サザはどうしてほしいの？」

「もっと強く、乱暴に.....お願い、だから.....っ！」

「よく言えました。ご褒美をあげる♡」

「あ、ああっ、すごっ、すごっ！！」

ミカヤがサザを突き上げるように激しく動く。

「く、来る、なんか来るっ♡ミカヤ、みかやあっ！」

「イキそうなの？サザは本当に可愛いわ、一緒に気持ち良くなりましょう♡♡」

「うん、なる、ミカヤと一緒にイク、イクウウウッ！！！」

サザが絶頂を迎えた瞬間、ミカヤもサザの中で射精した。サザの腸内が精液で満たされていく。

「ふああ.....ミカヤの熱いのがいっぱい出てる.....」

「サザ、あなた最高だわ。私達相性ピッタリね♡」

「そ、んなの、分かってた.....こどもの頃から、ずっと.....ミカヤのことだけ考えて生きてきたんだから、当然だよ」

「嬉しいこと言ってくれるじゃない。それじゃ、まだまだできるわよね？」

ミカヤがサザの耳元で囁いた。

「もちろんさ。ミカヤのためなら、俺はなんだってするよ」

「ありがとう、愛してるわ」

サザがそう言うと、ミカヤは再びサザの中にペニスを挿れた。

「ひゃうう！ミカヤ、そんないきなり奥までえ.....」

「あら、サザのここは私のこと受け入れてくれてるみたいだけど？」

ミカヤがサザのアナルに指を這わせる。そこは既にさまざまな液体で濡れており、軽く触れただ

けでクチュクチュと水音が聞こえてきた。

「あ、ダメッ、そこ弱いから触っちゃダメ.....」

サザが子供に戻ったように恥ずかしがりながらミカヤの手を掴んで制止しようとするが、その手には力が入っていなかった。

「嘘つき。こんなにヒクつかせて喜んでるクセに」

「違う、これは、ミカヤを受け入れる準備で、だから、あ、あああんっ♡」

「サザのおちんちんもいっぱい喜んでるみたいだしね.....?♡ほら、もう何回もイッたのに、また硬くなってきちゃった♡」

「あああっ、そんなにされたら、俺、またイク、イツちゃうからあ！」

「いいのよ、何度でも気持ちよくさせてあげるから」

「だめ、これ、すぐイク、ああーっ！！」

「きゃうん!？」

ミカヤが急に犬のような声を上げる。サザがイクことで腸内が締め、よりミカヤのちんぽを飲み込んでいく。「すごい、サザの中、熱くてヌルヌルで、絡みついてくる.....」

「はあ、はあ、はあ、ミカヤ、俺もう無理、かも.....これ以上は本当におかしくなっちゃまう.....」

サザが弱々しく首を振っている。その目尻からは涙がこぼれていた。

「わかった、じゃあこれで最後.....たぶん」

「え.....」

ミカヤがサザの両足を自分の肩に乗せると、そのまま腰の動きを激しくする。

「ひゃ、やだ、これ、奥まで届いちまって、おおおおっ♥おぐっ♥おぐにっキクっ♥♥♥」

サザの腸の壁が抉られるように突かれ、その度に獣のような嬌声が響く。サザの目は完全に蕩けてしまっていた。

パンッ！パンッ！パンッ！！肉同士がぶつかり合う音が響き渡る。サザの身体が激しく揺さぶられ、その口からは唾液が垂れている。

ミカヤがラストスパートをかけ、その動きをさらに早めていく。

パンッパチュパチュンッパンッ！！その音とともにミカヤのチンポがサザのアナルの中で暴れ回る。

「あああっ、いい、イクぅ、ミカヤのが、ケツん中いっぱいであ.....！」

サザが舌を出しながら喘いでいる。ミカヤがサザの一番深いところへ突き入れると同時に射精した。

ドピュルルルー——！！ビュクッ、ビュッ、ビュー——————！！大量の精液がサザの直腸を満たし、それでも収まりきらなかった分が逆流してきて、サザの肛門から吹き出した。

サザの腹が膨れ上がり、妊婦のように膨らんだ。その目は虚ろで、口元からはよだれが流れている。

ミカヤがサザの中から引き抜くと、ぽっかり開いたままのサザのアナルからドロリとした白濁が溢れ出す。

サザが痙攣しながら倒れ込む。その顔は幸せそうだった。

「ふあああ.....すげ、こんなに出たのか.....？」

サザが尻の穴から流れ出る精液を眺めていた。

「どう？大丈夫.....？」

「うん、まあな.....思ってた以上だったけど、なんとか」

「そっか.....良かった.....」

ミカヤは微笑みながらサザの頭を撫でる。サザは顔を赤らめながらもそっぽを向いた。

2人はベッドの上で横になっていた。「それにしても、まさかあんな事になるなんてね」

「ああ、俺もびっくりだ」

サザが寝返りを打ってこちらを向いてきた。

「でも、これで俺たちは本当の家族になれたんだろうな」

「そうだね」

「あの時は、ごめん.....ちゃんと、できなくて。知らなくて.....ミカヤを傷つけた。俺が安易に――」

「ううん、私こそ。あなたを傷つけてしまったのは私。

.....考えたくなくて、ないふりをしていたの。私がふたなりで性欲が強くなってしまうこと。ちゃんと話しておけばよかった。あなたの気持ちを分かってあげられなかった。本当にごめんなさい」

「そんな事ねえって！ミカヤは何も悪くねえ！」

「サザ.....」

「俺の方こそ、ミカヤの事を全然考えてやれて無かった。だから謝るのはこっちだよ.....。ありがとう、受け入れてくれて」

「サザ.....好き」

「ミカヤ.....好きだ」

お互い見つめ合う。そして自然と唇が近づいていく。2人の舌が絡み合い、濃厚で激しいキスを交わす。

「んっ、ちゅ、ぷはあ.....」

「はあ、はあ、ミカヤ、もっとしようぜ」

「ふふ、いいの？」

「ミカヤが望むなら」

再び唇を、身体を重ねる。何度も、何度も。

できなかつたあの日の続きをするみたいに――。